



神の恵みの摂理に 生かされて

立川神の教会 牧師 藤田 洋



藤田 洋 師

一九四七年四月二十九日敗戦二年の春 私は友人と鶴ヶ城大手門石垣の上で桜見物をしていました。下で打ち鳴らす太鼓の音につられ覗くと、キリスト教の路傍伝道の群。彼らに桜の枝や石を投げ、罵倒し、からかった。しかし、わたしにトラクトをくれた。そこには、山室軍平師が書いた「罪の払う価は死なり」の見出しがあり、その言葉に愕然となったが理解できなかつた。そのトラクトを手がかりに教会を尋ねようと思った。そこで篠崎進治牧師の説教を聞いた。私たちの罪を贖うために罪のない神の子キリストが十字架に架かり死んで下

さつた。その方を受け入れ信じなさい、という話であった。私はそんなことは信じられなかつたので、私は、同師に矢継ぎ早の質問を浴びせかけた。師はぼろりと涙を流された。その涙は私の信仰に対する疑問を払拭させた。

一九五一年三月、私は、高等学校卒業後ある小学校の教師になることが決まったため、恩師である多辻春吉師夫人、敏師の家に行つた。その目的は、就職のご報告と祈っていたためである。敏夫人が「それじゃお祈りしましょうね」といわれ敏夫人が祈り始めたが、祈りが途中で止まり、不思議に思っていると、私にこう語つた。「藤田さん、献身を約束したのではないですか？列王記上19章19節、預言者エリヤがエリシャを後継者として選んで「行け、帰れ」という語られた言葉が響くのです。もう少し祈ってみなさい」と言われ、作年の夏、磐梯聖会で「献身する人はいませんか」という声に私は応答していたことを思い出した。とはいえ、老齢の両親や病弱な姉を思うと涙が止まらなかつた。「どうして今、私が・・・この問を何

度も繰り返した。それから数時間後に「人もし我に従い来たらんと思わば、己をすて、おのが十字架を負いて我に従え」マルコ8:34が全ての不安を打ち消すように心の奥底から平安が湧き起こつてきた。両親の猛反対に合い、召命感のみで生活費旅費学費もない私は、神戸にある神学校に歩いていく覚悟をしていたが、不思議にも送別の日にある兄弟が下さつた餞別が神戸までの片道切符代であつた。

思い返せば、鶴ヶ城のあの日から始まる神の選びと恵み、敏夫人との祈りの時から、私の両親の受洗、三人の姉の受洗、息子の献身等神の恵みの摂理を思わざるを得ない。新しい年も神の不思議なご計画が進んでいくのであろう。期待をもつて歩んでいきたい。

